

追悼！ 宮原巍（たかし）氏を偲ぶ

宮原 豊（9組）

去る11月24日（日）00時35分（ネパール時間）に、ヒマラヤ観光開発（株）代表でホテル・エベレスト・ビューの創始者として知られる宮原巍氏がネパール・パタン市の病院で帰らぬ人となりました。衷心より哀悼の意を表します。

2012年の関東同窓会総会は我々65期の幹事年でしたので、同郷の縁から筆者から宮原巍氏（50期）にコンタクトし、7月1日の第51回総会において「ネパール半世紀の変遷」と題して講演していただきました。逝去の報を受け、28日（木）に新橋のヒマラヤ観光開発（株）を弔問しましたところ、当時ネパール在住の宮原社長との間をつないでくれた同社のMSさんがその日たまたま在席されていたので、詳しい話を聞くことが出来ました。



2010年、日本ネパール友好協会パーティで

今年の4～5月に横浜の病院で胃がん除去の手術を受けて入院生活をしていたが、本人はずっとネパールに帰国したいと希望しており、ようやく10月に帰国したところだったそうです。MSさんはそもそも病気見舞いのつもりでネパール入りしたところ、そこで社長の最後に立ち会うこととなり、死後3日間のプージャ（礼拝）に参列して帰国したそうです。27日に遺体はエベレストを望む3880mに位置するホテルに移され、そこで近親者や関係者により茶毘に付され、いずれそこにメモリアルが建てられるのではないかとのことでした。ヒマラヤ観光開発（株）は娘の宮原ソニアさんが代表取締役役に就任し故人の遺志を継いでいかれるそうです。

宮原巍氏は3冊の著書「ヒマラヤの灯」「還暦のエベレスト」「ヒマラヤにホテルを三つ」を出版しました。それに加えて根深誠著「ヒマラヤのドン・キホーテ」がありますが、筆者は29日に65期ホームページへの追悼文を記そうとこれらの本を読み始めましたが、その波乱万丈な生き方に圧倒されつつ、つつい内容に引き込まれて直ぐに書き始めることができませんでした。「ヒマラヤの灯」では、エベレスト初登頂のヒラリー卿との議論に、経済開発と環境保護の両面をとことん追求する宮原巍氏の基本姿勢がよく理解できます。

ヒマラヤへの畏敬とネパールの人々に対する愛情を縦糸にして、若い頃から育んできた山男たちとの友情を横糸にして、その縦横の関係を大切にした人でした。MSさんによると、4冊目の本の構想が既に頭の中に完成しており、本人曰く、本の題名は「何でも中途半端だった」にしたいとか、「ヒマラヤ観光にかかる夢はまだ道半ばである」との意味が込められ

ているそうです。「ヒマラヤにホテルを三つ」建てながら、85歳で息を引き取る寸前までネパールの観光産業・経済開発と人々の暮らしの向上に大きな夢を胸に抱き続けていたようです。

同郷と言っても年齢が15歳も離れた宮原巍氏と直接の接点はなく、初めて言葉を交わしたのは、私がインド・ニューデリー駐在中（2001～2005年）に、第2のホテル・ヒマラヤ・カトマンズに滞在した時のことです。その頃に宮原巍氏はネパール国籍を取得し、その後2006年にネパール国土開発党を設立、2008年のネパール制憲議会選挙に立候補しました。王政廃止後初のネパール連邦民主共和国の選挙として内外に注目される中、宮原巍氏は真に国と国民の将来のことを考えた開発計画を引っ提げて選挙戦を戦いました。しかし、マオイスト（共産主義者）が権力を制する中、当選することはかなわなかったものの、今まで以上にネパール国民として大きな信頼関係を得たのではないのでしょうか。

2012年は第3のホテル・アンナプルナ・ビュー建設に奔走しており、その年の年末から工事が始まったそうです。2015年6月25日に発行された著書「ヒマラヤにホテルを三つ」の出版直前の4月25日に発生したネパール大地震により、死者8,500人、負傷者2万人以上、首都カトマンズ周辺の世界遺産をはじめとする道路や建築物が甚大な被害に見舞われました。そのニュースを日本で聞いた宮原巍氏は直ぐに帰国し、自らホテル・エベレスト・ビューやホテル・アンナプルナ・ビューの建設現場の安全確認を行い、周辺地域の復興に取り組むこととなりました。関東同窓会はネパール支援のための義援金を募りましたが、それを現地に繋いでくれたのが前述のMSさんです。

このような大震災の直後に、この本を出版してよいものか悩みながらも、ネパールの将来のためにという強い思いから出版に踏み切ったそうです。この本に前述のネパール国土開発党のマニフェストが紹介されているが、10年後、20年後、あるいは50年後には実現するかもしれない大きな構想が提示されています。

そして宮原巍氏の悲願であったホテル・アンナプルナ・ビューは今年2019年の秋に、多額の建設資金を出資したワールド航空によりグランド・オープンしました。宮原巍氏は、エベレスト・ビューは「点」であるが、アンナプルナ・ビューはポカラを中心としたネパール中央の広い「面」の発展に結びつくものであると考えていたようで、大きな夢の実現に向けて第一歩を踏み出したのでした。その遺志は、後に残された人々によって必ず引き継がれていくものと思います。

日本で癌の手術をした5月頃に、友人から寄贈されたグランドピアノが横浜港を出港し、船、トラック、ヘリコプターと繋いでホテル・エベレスト・ビューに運び上げられたのが8月3日だったそうです。そして日本から招待されたピアニストによるお披露目コンサートが開催されたのが11月11日でした。その時に招かれた地元のクムジュン村の子供たちがピアノとピアニストを囲んで撮った写真をMSさんが送ってくれました。宮原氏本人はホテルまで登る体力がなくコンサートには行けなかったため、カトマンズの自宅でそのピアニストの演奏を聞いたそうです。



宮原巍先輩、エベレストに向けて響くピアノを聴きながら安らかにお休みください。

なお、MSさんの話では、2月に東京で宮原巍氏のお別れ会が行われる予定だそうです。詳細が決まりましたらあらためてご案内します。



2012年6月15日、65期同期が宮原巍氏を囲んで第51回関東同窓会総会の打ち合わせ。